

國
不
崩

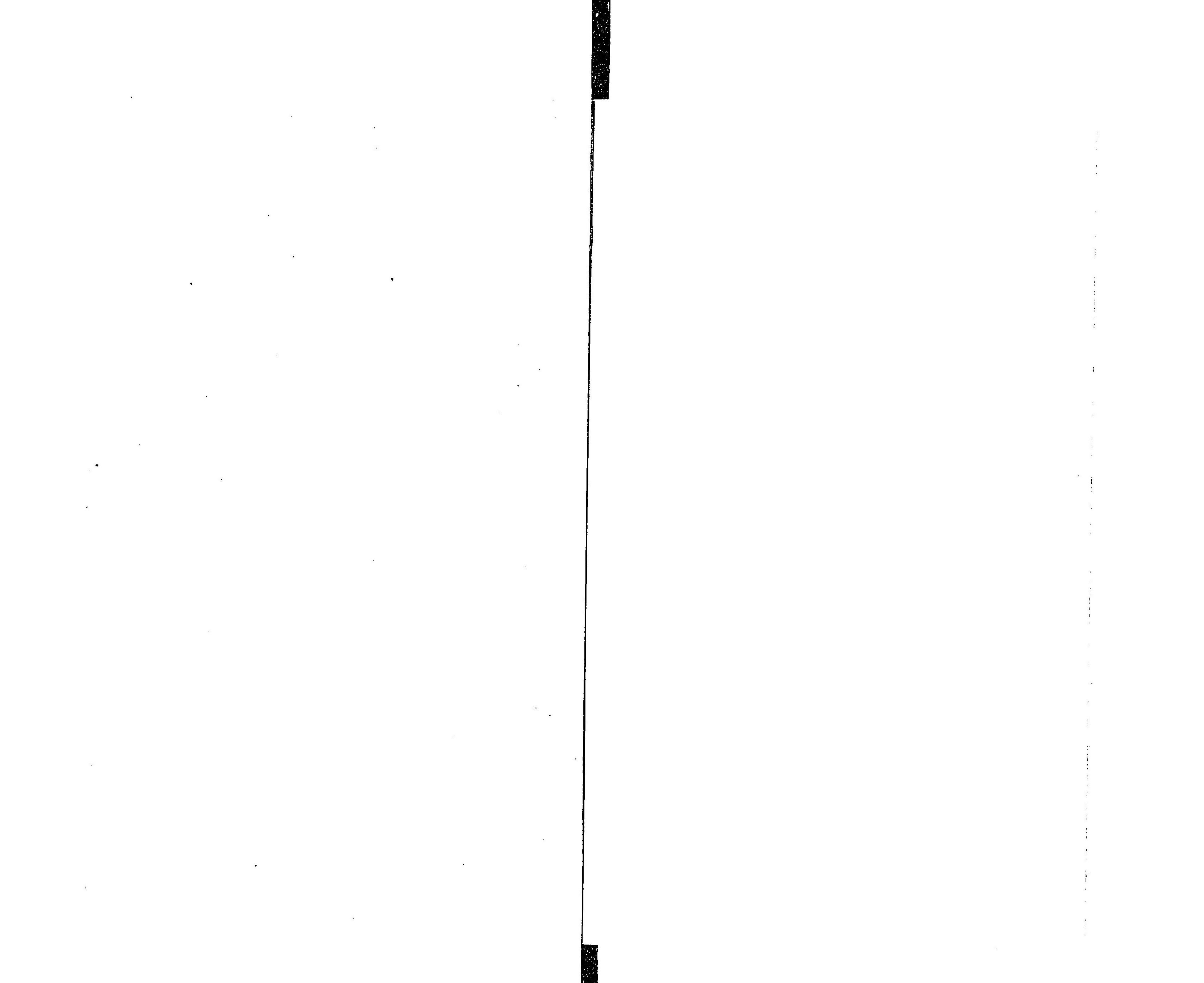
志
結
為
一
學

316



藏校學街美京東

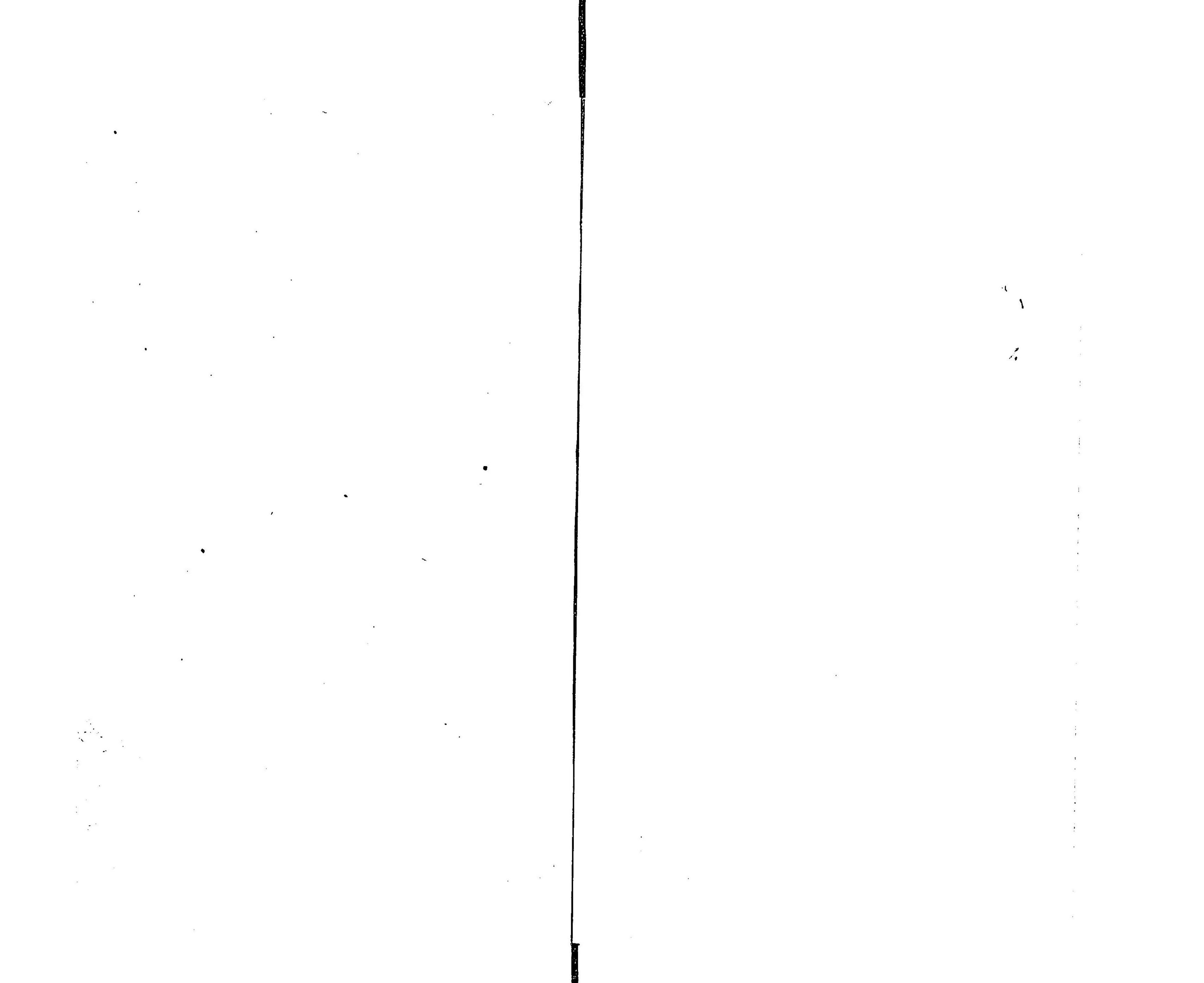
音觀母慈





故ノエノサロ博士士

鐘 庵





藏寺安長中谷

師藥

327
392

志のぶ草

岡不山朋 寄贈本

目次

芳崖先生逸事

- 一 絶筆の慈母観音に就て……………
- 二 翁の持論と美術學校の創立……………一二
- 三 芳崖翁と大森……………二五
- 四 翁の女子教育……………三三
- 五 先生と子との關係……………三六

芳崖先生逸事

43.12.15
寄贈

芳崖先生逸事

絶翁の慈母観音に就て

都新聞所載

芳崖翁の技倆に就いては既に世論も定まつてあるが、又翁が非常な綿密家で根氣の強い人であつたことも予がお話するまでもなく、彼の美術學校所蔵の慈母観音の圖を觀ても知らるゝであらう。之が翁の絶筆で、しかも未だ完製して居らぬ、即ち未製品である。此繪を描かれる時分は、予は毎日のやうに傍らに侍して居つて、金泥を消させられたり胡粉を製らせられたりした。觀音の後背燦爛たる金光は予が消粉した金泥で、金砂子は雅邦翁が手傳つて飾つたのである。予が色々示教せられたのも此繪をかゝれる時分であつた。何時でも此觀音を見ると昔の事が偲ばれて坐る懐かしい感じがするのである。翁の傑作で未製品は故フエノロ博士所蔵の、宮殿に仁王惡鬼を捕ふるの圖と此觀音である。仁王は紙本極彩色

で三ヶ年掛つたので、観音は絹本で、一ヶ年半程掛られたのである。

今歳恰も翁の二十三回忌に當つて、翁がこの観音の圖をかゝれた時の苦心の程をお話して見やうと思ふ。もと此原圖は、明治十四年佛國の博覽會へ出品する爲めに描かれた大作の観音の下畫より採られたのである。佛國の博覽會への出品としては、此他に鐘馗を水墨で、鐘馗之圖は故フエノロサ博士の手から今は米國ボストン博物館所蔵となり、觀音之圖は全博士が佛國にて買取りしが今は所在不明なり淡彩描かれたが、この方は鑑査に落第して、観音だけ出品になつたのであつた。鐘馗之圖は故フエノロサ博士の手から今は米國ボストン博物館所蔵となり、觀音之圖は全博士が佛國にて買取りしが今は所在不明なり其後數年の後、翁は文部省の圖書取調掛となつて、圖書教育の取調をせられて居つた。此取調所は小石川植物園内に置かれてあつたので、翁は毎日小川町の宅から非常な高い木履を穿いて、謠曲を唸りながら通勤されたものである。然るに、明治二十年の三月であつた、翁は狩野友信翁と上州妙義山の風景を寫生に行かれると云ふので、予等も隨行して、共に碓氷や妙義の奇勝を探つたことがある。其時に中、嶽(金洞山)の幾つもの石門を潜つたが、實に奇景である。雪舟の畫のやうである。その時翁は、あゝ茲に觀音様が降りたらよからうと言はれた。翁の歌に

嚴美くあやにたふとしかむろきの

神のつくれる此おほみ山

と云ふのが、即ち此時の即吟である。翁は萬葉調を好まれたので、此で家に歸ると、翁は先年佛國へ出品した観音の下畫を出して、今美術學校色々と観音の下畫をとり初めた。翁はいつでも何か考へが浮ぶと、直ぐに描いて見るのが習慣であつた。反古にでも、切れつばしにでも、懷紙にでも、巻紙にでも、筆や鉛筆や木炭や何んでも、彼でも、手當り次第に取つて、描いて見る。で、此時も同様で、考へては描き、考へては描いた、其小下畫は紙屑のやうになつて、繪具箱の引出しに入れてあつたが、翁が亡くなると、誰か、持出したと見えて、影もなかつた。今美術學校に残つて居るのは、天女の下畫と取混ぜて、少々あるのみである。そこで、やうやく下畫が出来上ると、今度は、絹地は、只の繪絹では、油氣があつていかぬ、一度練らねばと云ふので、練りにやつたが、扱て何つもの様に、枠に張る事が出来ぬから、釘を枠に植ゑて、それに引張つて張附け、別に綾を以て釘を覆つたのである。礬水も普通のものでは無い、色々苦心をされた。當時のことは、表具屋の銀次郎が精しく知つて居る筈である。下畫が出来上つて、いよく、絹に當てたが、まだ圖取や形に氣に入らぬ所があつ

て、絹の上へ木炭をゴシ／＼あてゝは考へ、若し人か來ると誰でもかまはず説明を初められた。是は斯う、あれはどう、と小使でも植木屋でも來る人毎に捕まへては説明せられた。濱尾(新)さんが來ても高嶺(秀夫)さんが來ても同じくやる。若し先方が氣に食はぬ事を言ふと、馬鹿——と一喝する。そして若し、植木屋でも又は、小供でも、先生これはをかしい、これは斯うしなければ、と言ふ、それが氣に叶ふと、そこだ(方を入れた語氣)誰の頭にも美術の神様がやどつて居ると言つて喜ばれる。翁は美術にかゝつては眼中貴賤男女老幼の區別がない。そこで、翁を能く知らない者は、極く無頓着であるかの如く思ふが、決してそうで無い。禮義作法は能く心得て注意をせられた。なか／＼微細な點に迄行き届いて居たのである。それだからつまり箇様な精巧なる觀音の畫も出來たのである。高貴の方の御前へでも出るには、必ず口滌いで行かれた。それは其筈で、幼少の時から藩主毛利甲斐守の奥に出入りして居られて、大名方のお客が見えた時は、笛や鼓のお合手を仕つた事も屢であつたとは、翁自身に語られたことである。それで、翁は武士的作法は小供の時から自然に行ふやうになつて居つたのである。或る者の如く、放縱で俗眼を驚かす

が如き無作法の人ではなかつた。それは誰でも翁の遺墨を見れば分るだらう。どの圖にも決して粗末な破格な筆はない。圖がらには思ひ切つた物や意表外なものもあるが、着筆や渲染は余程注意してある。所謂一氣呵成的な、なぐり畫はせられなかつたのである。美術學校にある不動明王や例の大鷲でも、圖がらでは色々世間の評もあるかは知らぬが、其豪壯な點は一寸まねは出來まい。それに、其運筆が俗人を驚かす様な弱氣は帯びて居らない。實にウチ付がよい。これでこそ眞の雄健な筆力ともいはるゝのである。渲染に至るまで所謂一點一捺と雖も苟もせずと云ふのである。

翁が此觀音をかいて居る時、皇太子殿下が春宮殿下と申上た時分に時々御學友と學習院の服を召され、ランドセルを背負はせられて、植物園へ行啓されたことがあつた。集會所で御休息になると、御獨りで取調所に御出になつて、お爺さん繪をかいておくれとおほせられる。翁はしきりに描いて居て、氣が着かない事があるから、手等は傍から殿下の御入りを翁に注意すると、早速居直りて端座するのが例であつた。御幼少の殿下は、何時もそれを氣の毒に思召されて、イ、ヨ／＼とお

ほせられる。翁を初め子等迄も其恐れ多き御言葉に感涙にむせぶのであつた。殿下は繪を御望になる。何々をかいてとおほせられると翁は恭しく謹しみ認め、て差上げる。或る時の如きは猪子をかいてとおほせられて翁をお困らせになつた。すると折からの驟雨で空でござん、やつて來たので、殿下は雷をとおほせあると、御附きの人達は、殿下の驚かせ給ふ處をなど申て、其々戯れ興せさせ給ふやうな事もあつた。

かくて、追々と着色が進んだ。觀音の尊容は先きの佛國へ出品のとは異なつて居る。是れは翁が奈良へ行つて天平以前の佛像を見て、佛の面容をさつた。それから後ちに描いた觀音や釋迦や阿彌陀は、凡て天平式に自分の意を加へた、即ち芳崖式である。河瀬秀治氏所藏の出山の釋迦長安寺谷中にありの墓所の藥師等は其一例である。元々今回の觀音は、極彩色でなく、淡彩に金泥をあしらはうと思つて初められたのであるが、併し是迄の様に水墨仕上では面白くない。何か一と工風と色々考へて、色線をも用ひられた。其色には皆胡粉を加へられたのであつた。觀音の肉體になるところ、顔や手は、裏から雲母を塗られた。是は、結城正明氏の意見を

参照したのであるが、出來工合がよかつたが裏打をさせて見ると、むらが出て面白くないから、其部分だけの裏をはがして手入れをされた。水瓶から靈水が滴たれて、水精の華となり、善哉童子を載するところ、最も苦心されたのである。線の組合せと色彩の配合が舊套を脱して、一種の新機軸を現されたのである。觀者は此處に注意してもらはなければならぬ。翁が是をかく時に、戲言に、これは何で、童子の後背は胞衣である。と笑はれた事がある。それを眞に受けて、あの繪は斯う云ふ理けたさうだ、など、言ひ傳へて居るものもあるやうだが、翁の眞意は深くして常人の窺ふ知る處では無い。序だから言ふが、此善哉童子のモデルは翁の愛孫眞坊である。嗣子廣崖氏の長男で、雅邦翁の長女節子が産んだのである。此眞坊も今は長安寺の翁の側に眠つて居る。併し其靈はとこしへに此畫中に籠つて、翁が世を教へる暗示をして居るのである。それから、左の瞰下に奇峯が靈霧に包まれて在るのは、即ち妙義金洞峯で、それが第二の石門である。ところが、初め描いてから段々と觀音の着色や瑞氣の雲が仕上がつてくると、下界の調子が面白く無い。種々に考へて渲染をして見られたが、思ふやうにゆかぬ。翁は夢中になつて、あれやこ

れやと色調をやつて見る。けれどもどうも味くいかぬ。其苦心の程は側に見て居る予等は實に見兼ねるやうであつたが、予等の力では如何ともする理にゆかぬ。其内翁は火鉢に向つて煙草を一服やりかけると、ふいと灰をすくつて繪に當がつて見て、是は面白い。これだ。と一聲高く灰を繪具皿で解きかけると、普通の顔料のやうに解けぬ。仕方が無いから砂子のやうに蒔掛けた。然し、濡れて居るから、其實の色が出ない。まあ、是でよからうと、稍安心の體で、謠曲を唸りながら、大きな紙入で懷を脹らして、例の高木履で、仙人でも歩くやうに凜然として宅へ歸られた。其夕方は定めし例の如く、隣家の結城氏の宅へ行つて、大猫を膝にして、お互に孫自慢をして居られたことであらう。翁は最愛の夫人の亡なつてからは非常にかみしる感に陥つた。此大猫は翁が愛して居つたので、翁の歸りを待つて共に歸へ行くのである。翁が亡なるとその晩から何れへ行つたか影も見せなかつた。翌日は、いつもより早く取調所の入口を上られて、例の松風を唸りながら、つと奥へ通り、ふいと観音の圖を見ると、こはいかに、下界は靈霧に包まれて居るべき筈なのか、何とも名狀すべからざる不快な色合の隈取りになつて居つた。翁は驚いたの驚かないのつて、銀、銀、と夢中に經師屋を呼で、銀、大變だ、と殆んど哭き出しそうに、

又自失せん計りであつたと、銀次郎が後に談つた。さうなると翁はまるで小供同様だ。銀、何んとかなるまいかと言つて、しほ、くされたが、別に妙案も無い。洗ひ落すより外はないのであつた。この事を漏れ聞て、今頃の若い畫家は、芳崖先生が灰をふつたり色々なことをやつて美事な観音が出来たのだと言つて、その誤つた事をまねて得意がつて居るものもある。公設の美術展覽會にもそんなのを見掛ける事がある。もう一つ序に言つて置きたいのは、此観音は、翁の苦心の作ではあるが、又一方には色彩の研究をやつた試験的の物で、西洋顔料も使用されたから、出来上つた當時から見ると餘程今は色が變つて居る。色が段々淡くなつた。爲めに、金色が益々燦爛として來た。觀者は其邊を考へて觀なければいかぬ。翁は常に、何んでも御同様に是から種々と稽古しなければならぬと言はれた。此繪が出来上つたら又新しい研究をされる筈であつたが、遂に是が絶筆になつたのであつた。

時は十一月一日であつた。何つともよりも元氣がないので、友信翁や雅邦翁は心配して、どうしたのかと尋ねると、けふの明方寝冷でもしたのか、悪夢を見た。其夢

は、何つもの様に小川町の自宅から戸田伯爵邸の傍を通ると、折から邸内で煖爐の掃除でもするのか、屋上の煙突の處に一人の職人が何か仕て居る、かと思ふと、煙を吹てゐる其煙突の中へ落ち込んだ。さあ大變、大火傷をしたであらう。早く薬オ製トされたものオを取つて来てつけて遣らうと、急いだが高木履だから走られない。早くくと氣をあせつて、ふいと目が醒めたら、全身汗みどろになつて居つた。醒めてからも猶氣になつた。やがて夜が明けたから、朝湯にでも浴つたらよからうと入湯して見たが、何んだか今に體がぞつとするやうだ。今頃はあの職人は死んで仕舞つたらう。と言つて、鬱いで居られるから、皆が今日は休んだらよからうと言つたが、ナニ今少しで此繪が出来上るから、と言つて、紙帳の内に入つて、金砂子を蒔て居つたが、大儀でならぬから、橋本さんあなたなら大丈夫だから諦つて下さい。大抵は出来たのだがと、如何にも苦しきやうである。そこで、皆が勸めて、毛氈で包んで車に乗せて歸へした。それが病み付きであつた。然るに同五日午後二時頃でもあつたか、昨日から昏眠状態であつたのが少し醒めたか、寢返へりでもしたさうであつたから、皆で抱へて位置を直して、予は腰部をさすつて居ると、目をキ

ョロツと開けられた。予は思はず先生と一聲呼んだが、僅かに聞えたらしい様子であつた。それが最後で、再び眠りに入つて、二時間程すると呼吸が段々に低くなつて、遂に永眠されたのである。時に享年六十一歳であつた。

(明治四十三年十月)

◎明治四十三年十月二十九日、二十三回忌追善茶話會席上、先生自筆「陳列目錄」

秋景山水 不崩宛手簡 水墨山水、堅四寸、幅四寸六分、釋迦說法、堅七寸三分、幅三寸五分、慈悲觀音、堅七寸三分、幅三寸五分、自筆齒輪額面、以下草稿類
山水横物 龍卷、日月、釋迦說法之圖、樓閣山水二幅對、巖壁、富士卷狩、唐子遊
八枚、福祿壽二幅對、山縣公依頼の下畫、鷺追、猿、猿、立物、伊藤公依頼の
下畫、陶師鬼の綱引、山姥、花卉小品三點、雜小品
○先生十九歳の時の縮圖六幅、堅一尺六寸乃至二尺二寸、幅一尺六寸、弘化三、丙午七月
晦日寫、鼻、隣地取、とあり。○晴、鼻、先生、菊花、寫生、一卷、一丈九尺、卷初、天保十一、千九、月、寫
之、卷末、天保十二年辛丑九月二十四日寫、とあり、天保十二年は芳崖先生十四歳也。

翁の持論と美術学校の創立

此の話は國民新聞社よりの依頼によつて書いたもので、初め九月下旬同新聞社員某より、近日参上いたすから何か芳崖先生の逸事を話して呉れとの事であつたので、承知の旨返事をしておいたが何時になつても来ない。其内に忌日にも近かづくから、今度はこちらから草稿を徳富猪一、野田、宛てて送つて置いたが、(十月十五日)其後何等の音沙汰もない。そこで不要ならば返却するやうに申送つたら、編輯局の美術部から、十月廿五日付けで「拜復本社長への御芳書拜見候御寄稿は直に組入の手筈に致し候處其前日に他新聞に同様の記事有之もの數見え候爲め一時見合申候追て時機を見て掲載可致右御承知被成下度候云々」と云ふ返事が来た定めし今日の先生の忌日には掲載されたであらうと思ふ。

翁が美術学校創立に際して大功のあつたことは嘗て予が美術雑誌眞美界上に美術学校創立の前後話をしたことがあるし、又河瀬秀治氏も某雑誌の記者に其話をされたから、或る部分の人は既に知つて居らるゝであらうが、翁は決して通常の繪師畫工の流ではなかつたのである。餘程面白い大きな考を持つて居られたのである。茲に一寸翁が傳記の一節を話して見よう。翁は、少時木挽町狩野の塾に入られた

ので、十八九の頃でもあつたらう。其時の塾頭は信州松代藩の三村晴山で、此人はなかなかの人物であつた。時の志士と交つて天下の事を論じた。佐久間象山先生とは同郷で、しかも先輩であるから特に親しかつた。佐賀の閑叟公とは木挽町狩野の關係で出入をするし、それから薩摩の齋彬公にも非常に重んぜられて、度々招かれたといふことだ。何の御用であつたか、それは今説明する必要もなからう。大坂や京都へも往來して居つたそうだ。今年の春國民新聞主催の維新志士遺墨展覽會があつたが、其時に晴山の畫が出陳してあつたが、或は縦覽人には見落されたであらう。説明の人も氣が付かないやうであつた。

芳崖翁はつまり此人の感化を受けたらしい。此人も又芳崖の人物を見抜いて、後世恐るべき者になるだらうと言つて居つたそうである。嘗て象山先生の處へ同道したことがあつたが、象山先生は芳崖を見て、此小僧さんは面白い、私が經書を教へあげよう、今に人物になると言つて、それから翁は毎日稽古に行つた。最も、象山先生は晴山の關係から木挽町の塾で月に一二回經書の講筵に出られたのであるが、特に芳崖を見込まれたのである。翁の大人物である事は既に十八九歳の頃か

ら芽ざして居つたのである。維新後翁が零落して居つた時でも座右には象山先生の書のお手本が在つた。これは先生から藝場の圖を頼まれた時、其御禮に貰つたのだらうである。

其後、翁は長府に歸つて、海防の事に係はつて沿岸測量の任に當つた事もある。維新後舊城内が荒地となつて居るので、開墾をするのだと言つて、そこに小屋掛けをして養蠶をやつて、糸を採つて居られた。翁の考では、天下の趨勢畫事を顧みる時では無い。よろしく殖産の道を講じ、海外の輸出を計らなければならぬと云ふのである。そこで、是迄の糸採り機械では不便だからと言つて、自分で色々改良された。なか／＼器用な人であつた。小供が遊びに来るとよく箱などを造つてやつたものだ。

蠶織の業は失敗に終つた。遂に友人等の勵めにより明治十年十月上京するこゝとなつて、芝新堀町に荒物屋を開店して、翁は店番をして夫人は奥で機織をして暮しを立て、居られた。然るに其頃、博物局に雇が入るとの事で、傳てを求めてそこに出かけられたが、圖らず師の晴川に會つた。木挽町狩野の大先生が雇員となり下つて居るのである。翁はこれを見て如何にも氣の毒の念に堪へず、二人相擁

して互に不幸を歎し合ひ、泪にかき暮れたらうで、翁は師と共に雇員になるに忍びずとして、歸つて、猶も荒物商を營んで居られた。島津家の吹上天覽の犬追物を描いたのは即ち荒物屋時代である。なほ翁に就いては色々逸話も澤山あるが、兎に角常に大きな考を懷いて居られたので、予が師事して居る頃でも、時々天下の大勢を論じたり、教育の事や軍事の事迄でも、或時は外交や貿易の事に至るまでも論じられた。今のやうに西洋風が入りこんできては人情が輕薄になつてくる。大臣なんか西洋の眞似をやつて、夜會とか言つて女と手を引たり抱き合つたりして、踊つて夜明しをやつて、人民の困ることなどはおかまひがない。今に皇國の尊嚴をも傷つけはせまいか、バカ。と言つては、憤慨せられたものである。

日本國は美術國だから、美術を奨励して人心を高潔にしなければいかぬ。それから、外國人が日本の美術品を嗜むから、どし／＼新美術品を賣り出して、どうして日本の財源を作るのだ。それには美術と云ふ綱、圖畫教育の普及美術奨励を作つて、此綱をまいて、つと天下の人心を美術に引寄せなければいかぬ。と言つて居られた。すると、恰も文部省の圖書取調所が出来て、翁は其掛員になつた。翁は大喜びで、愈々綱

をまく時が来た、誰に會つてもいきなり、綱をまいて斯う引寄せると言はれるので、相手は煙に巻かれて、芳崖は奇人であると噂せらるゝに至つた。實はキ印だと思はれたのである。文部省内でも色々な評があつたそうである。其美術の綱の事で、文部省とかの或る上官の宅へ出かけたところが、折から主人は出勤せんとして玄關に出かけた處であつた。翁は、是は好い處だと言つて、其場で色々美術奨励の件に就て述べ立てた。學校設立の事をも説き付けた。主人は、今出勤するところだから何れ又其内に聞かうと言ふと、役所へ行くのは何の爲めだ、國家の爲であらう。今私の話を聞くのも同しくお國の爲だ。然かも國家重大な問題である。と言つて、翁は悠々と談話を續けて居る。仕方がないから、どうか今日は不得止事があるからと、今度はあやまるやうにして、話しを切り上げてもらつた事がある。それが一時評判となつた。芳崖が奇人だと言はれたのもいづれ其邊から來たのである。

翁は又、海軍の事をも論じて、義勇艦隊の必要な事を言はれた。『日本は海國であるから、海軍が強くなければいかぬ。それには軍艦が澤山なければならぬ。併し

平時澤山の軍艦を遊ばして置くのはつまらないから、其一部は商船として使用し、他の一部は海外諸港を巡邏せしめて、居留民を保護し、一方には國威を示すのである。これには種々な學者や種々な方面の人を便乗せしめて、色々な視察や研究をさせるので、それで、若し一旦緩急あれば、凡て武裝してそれ〴〵の任務に就かしむるのである。』と論じられた。最も、細かな事迄では話されなかつたが大體こんな事を常に考へて居られた。何んでも軍艦や其他兵器機械などは外國から買ふがよいが、さらば其入費はどうするかと云ふと、日本は美術國で、外國人は日本の美術品を好むから、内地では全力を盡して美術及美術工藝を奨励して、傑作品を作つて外國へ賣つて、それで軍艦や機械を買つて歸る。そうして其美術品は多くの美術家が協力して、各自得意の處を分擔して製作するのである。』と言はれた。

こゝに翁の手紙がある。それは翁が、時の總理大臣伊藤公から書を頼まれたので、大作の書をかいて送らうと思ひ、門人共にも下書を考へさせた。その時、翁は、それに就てわざ〴〵予が當時小石川竹早町の宅に來られたが、あやにく予が外出して不在であつたので、失望されたが、それではと言つて、置手紙をされた即ちそれである。翁が

意見の有る處を見るべく、唯一の志料であらう。文中伊藤とあるは博文公である。翁の手紙で然かも美術に關するものは他に見當らない。多分此一通だけかも知れぬ。

先は内々申上候言

御留守に而込り申候御直に

申上度言からに候へとも一筆

相願書認候儀也

此²しの繪は伊藤の頼み

にて天下分ヶ目の認物

に而私一人にて認候儀は

不本意何卒御けふ力

被下度 ²しの顔が

第一に願ひに御座候

寫生にては宜しからず

河瀬帶治氏談(美術界の今昔の一節)

松源の展覧會に狩野芳崖の出した七王提鬼の圖、縦四尺横二尺、中央に仁王が突立て鬼を捉へ、下に靈蓮々として仁王の足下より起り、後ろに電氣燈の如き裝飾があつて、此れより發する光線は、錦帳と相映じて種々の光彩を現はした様にて、其配色の變化、千態萬狀實に其妙を極めたものであつた。其時伊藤侯が松源の展覧會へ來て、芳崖の仁王を見た。前申した如く伊藤侯は西洋の空氣でなければ深らぬ人で日本畫何なか爲さんと云ふ頭腦で居つた。處が展覧會で此仁王を見て、之は如何にも不思議に善く出來た、成程日本畫も遊り方に依りては十分西洋を凌駕するものだ云ふ考へを起したらしい。これが只今の美術學校を起す動機となつた。此畫は惜むべしフェノロサ氏の有になつた。云々

五大洲をつかむといふ

心もちのわしを認

度候へとも何分私一人にては

覺束無く 被存候事

故先つ一應僕の下書

差上置候間何卒兩

三日内にちいさき繪にて宜

敷御座候間其御つもり

奉願上候

かの七尺に壹丈餘の

絹にわしを一疋認候

事故本書は大物に御座候

儀也

以後美術畫は力ら

芳崖先生遺事

た。云々
伊藤侯も芳崖の仁王圖を見て、大に日本畫の爲すに足るを悟り、芳崖に繪を依頼された。芳崖は喜んで之を諾し、且つ思へらく、此の機を外さず日本藝術の妙所を脱いて、侯の意想を動かし、大に我が美術界の振興を圖らんと、そこで御座敷を拜見いたし、光緒の受けかたも見なければならず、又主人公の好否も伺ひ、其上で豫め圖案を立てなければならぬ、御在宅の時に伺つてお眼にかゝりたいと申した。彌々明日來て呉れと云ふ日が定まつた。そこで芳崖は考へました、若し談話が断絶することあつては、侯は立去るに相違ないから話の切れぬ工夫をせねばならぬといふので、前夜、伊藤に遇つて斯う話して、次は斯う話さうと云ふ順序を、悉く手帳に記し、徹宵論次の工夫を凝して、約の如く伊藤侯を訪ひ、幸に美術談を試むることを得て、殆んど三時間寸毫の間断なく、各種の方面より滔々と我邦美術の概要を論じ盡した。跡で開けば伊藤侯も此長時の談話には困却せられ、約束の出動時間も後れたり云ふことです。芳崖は其歸路私の宅に寄つて手帳を

を合せて認 西洋行

と仕るつもりに御座候

也

左すれば名畫も

出來可やと相心得

居候故及斯候也

岡 様 芳 崖

明朝植物園迄

御來車被下候は、難有

奉存候也

廿七日 午後

(丈々三尺七寸行數原文の通り)

若しも翁の傳記を書かうと思ふ者は、此手紙を一讀する必要があるだらう。手紙

見せ、伊藤會見の事を談じ頗る満足を表して、己が好める話曲に深更まで歌を盡して歸られた。

芳崖が伊藤侯に試みたる美術談が、我美術界に無形の影響を及ぼしたる利益は、實に圖られませぬ。間もなく美術學校創設の内命となつた事實に徴して明かなのである。先づ政府はソエノロサ及び岡倉覺三を歐米に派遣して各國の事情を取調べ、其歸朝を待て美術學校を立てたが宜からうと云ふ廟議に進んだ此點に付ては我が美術界の士は、宜しく芳崖の勞を多としなければならぬ、其の恩を忘れてはならぬ。云々

世人或は芳崖を以て餘り西洋に傾き過ると云ふかも知れませぬが、芳崖のは、日本畫が西洋油繪に譲らぬといふ所を成し且つ示したのです。兎に角、芳崖は開黒時代にあつて轉々たる光輝を放ち日本美術の地に落ちたのを挽回したので、先づ近世畫家中の大豪傑といふても差支はない。當今で何の彼の云ふ人達も直接間接に芳崖のお蔭を蒙つて居るのでございます。云々

の中にある、以後美術畫は力を合せて認め、西洋行と仕るつもりに御座候也、左すれば名畫も出來可やと相心得居候云々とは、即協力して名畫を描き外國へ賣つて軍艦を買入れる考であつたのである。天下分ケ目とは此繪の出來如何に依つて、日本畫が果して西洋畫以上に價值があるかどうかを、廣く世に問はんとせられたので、延いては美術學校設立問題にも及ぶべき重大な認め物であるから、翁も非常に苦心を凝されたのである。五大洲をひとつかみにする心持とは、伊藤公の意を指したのである。何分私一人にては覺束なく存しられ候故云々の如きは、如何にその謙遜の徳に富んで居られたかも知られて、翁の人物の半面を窺ふ事が出来るのである。此畫が出來上ると、粹張りのまゝ表具屋の銀次郎に持たせて、官邸へ出かけられた。そうして、伊藤公に向つて滔々と日本畫の妙所を説明せられたそうので、歸つて来て、今日は伊藤をやつつかけたと言つて大喜ひであつた。此やつつかけたと言ふのは翁のくせであつた。即ち、自分の説にとき付けた時の事を意味するのである。その時に、合せて美術學校設立に就ても重ねて説き付けられたのである。翁が日本美術獎勵の件に就て初めて伊藤公に會見する時には、餘程注意して、前晚

は徹夜してその要點を手帳に認めて漏れのないやうにして行かれた。其熱心なのに公も舌を巻かれて、それでは何か描いて呉れないか。日本書は何れの點まで西洋書に對する事が出来るかといふところを表はして貰ひたい。と言はれたらうで、そこで伊藤さんが天下を一と握みにすると云ふつもりで猛鷲をかゝうと思ひ付かれたのであつた。で、色々下書をして見たが、思ふやうに行かぬから、門人等にも考へさせて、兼て自分の理想なる、協力して製作すると云ふ事をも實行して見やうとせられたのである。此繪が出来ると最後の点体は雅邦翁が仰せつかつて打つたのであると言はれてなかく、苦心された翁の畫を見る者は其邊にも注意して觀なければいかぬ大抵は燒筆を當てられるので此繪にも燒筆を當て、種々に考へられたが思ふ様に行かぬからそこで雅邦翁に頼んだので橋本さんあなたなら大丈夫だから点体打つて下さいと

此手紙を貰つた時の予は、十九か二十位の若輩であつたが、翁は、誰の頭にも美の神様が宿つて居られると云ふ考から、却つて予の如きものにも面白い考が出るだらうと思はれたのであらう。予が翌日下書を以て行つて、臂から頭眼の邊に就て寫生と異なり其區別を辨明する。其點やがき力によりて強く見えても下品になつてはいかんと、と大そう喜ばれた。其鷲の下書は、美術學校にあるが、半分位は門人の手に成つたものである。本物は翁が逝去された後、伊藤公から貰つて、美術學校へ納めたのである。

翁の手紙と其時の翁の下書三枚は予が大切に保存して居る。

明治四十三年十月十一日

附記明治四十三年十月廿四日翁の遺墨展覽會を觀て、それから谷中の長安寺に參詣した。十一月五日の命日には公務の都合で參詣が出来ぬ。今日は幸ひ臨時休暇だから久しふりで參詣したのである。老僧が出て来て色々昔し話しがあつたから、此手紙の事を話すと、老僧は、それで私も思ひ出したが、ある時芳崖さんがけふは鷲の畫をかかうと思つて動物園へ寫生に行つた歸りだと言つてやつて來られたが、あやにく私しが留守であつたので、それでは、此頃能を稽古初めたからと言つて、御堂の板敷で一時間程舞つて歸られたことがあると語られた。翁は松本金太郎に仕舞を習はれたので、舞ふには體をきめなければいかぬ。書もその通りだと言つて、此鷲をかゝれる時分は、人が來るとその話をされる。話しただけではと言つて起つて舞はれる。それ、この腰の處、こう行く處、と言ひかけて、どうも袴がじやまになるからと、袴を脱ぎ、これでもまだと、遂に眞裸體になつて、こゝだ、こゝと言ひながら舞れる。と越

中がはづれる。是は大變とあわて、締めなほされる。それが凡て眞面目である。植物園の集會所などでは、敷物の上はいかぬと、大机の上で舞はれる。観者にも下ではいかぬ机の上に座つて見ろと言はれるのでなく、閉口である。御本人は至極眞面目で熱心に舞はれるのだが、何んと云ふ仕舞か、只無言でやられるので、若しも笑ふものなら一喝されるから謹んで拜見して居るが、實のところ甚だ苦痛であつた。門人の中では高屋肖哲氏が神妙に拜見して居るからお氣に叶つて居た。此仕舞には色々奇談や失敗があつた。

(明治四十三年十月二十四日)

先生幼名幸太郎、延信と稱し、又鼻牌と號す、狩野勝川院の門に遊ふに及んで、勝海隱原雅道と稱す、維新後、改めて芳崖と云ふ、實甫、又翠庵と號す、文政十一年正月十三日を以て、長門國豊浦郡長府に生る、考は蓋信晴、又松岡と號す、此は伊秩氏、世々毛利家の繪師なり。

三

芳崖翁と大蒜

中央新聞所載

翁は生前非常に大蒜を嗜まれたものである。それはあながち甘美からではな
 5。これさへ毎日食して居れば體は丈夫になる、病氣は起らない、何んでも大蒜に限るといふ一種の信仰からである。風邪には是を卸して熱湯に入れて呑み、或は根を丸のまま焼て熱いのを食するものもよろしい、赤ん坊が産れたら海仁草のかはりにこの汁を呑ませると胎毒が下りる、その上體が丈夫になると言はれて、翁の愛孫の眞坊にもそれをまくり代りに用ひられたのである。其他、翁の家庭では色々調理して常に用ひて居られた。芝新堀町から本郷西片町十番地に移られた時などは、庭前きの籬根岸には悉く大蒜を植ゑられた。一とつの玉の皮をむくと幾つにも割れる。それが翌年には大きな玉になるのだと喜こんで居られた。或る時、予は、小石川の臺町の百姓家に大蒜が澤山作つてあつたのを見たから、翁に話す

芳崖先生逸事

と、それでは歸りに行つて見やうと言はれるので、案内した事があつた。翁は其百姓に向つて、この大蒜は何にするのかと聞いて見ると、ナニ家で食べるのでと言つたら、ア、そうかと、さも我意を得たといった様な面もちであつた。予等も時々大蒜を勧められたが、臭氣が強いのでいつもお免蒙るを常とした。曾て共に妙義へ寫生に行つたとき、瀛車が島や林の中をすぎ行くをり、翁は、此邊は昔しの武藏野の續きである。蒼求うりかほなの枯れたのがあると言つて、友信翁と古歌などを評し合つて居られるから翁は萬葉調をこのまゝのまゝ予は傍らから、先生、武藏野の萱を開懸して大蒜を植付けたらどうです。そうすると武藏野の大蒜野の原と云ふ様になるでしょう奥より出で、奥きに入るとやると、一同大笑になつた。そこで、時に先生、大蒜は今日はお持ですかと言ふと袂に在ると言つて、出して見せられた。翁は外出の時は何つても袂に入れて携へられたのである。最も予の郷里越前大野などでも、昔はよく門口に大蒜をぶらさげたのである。悪病除けだそうで、袂に入れて置くと、これも悪病除になると言つて居つたが、翁のは呪禁まじまじでは無い。實用的である。そうして大蒜萬能主義であるからたまらない。翁の側へ行くとブンとする。氣焔と相和して臭ふことがある。或

る時、フェノロサ氏の妻君が、先生くさいと言つたら、馬鹿一と一喝して、さすがの米國婦人をも閉口させた事があつた。門人の内で、本多氏が一番おとなしく同情すべき點があるので、翁は殊に目をかけて居られた。ところが、或時本多氏は、腦が悪るいか頭がやめると言ふと、翁はそれは大蒜を搦つて頭へ擦り付けるがよからうと教へられた。本多氏は、歸ると早速大蒜を買つて貰つて、頭へ汁をつけた。初めは少しヒリヒリしたが、我慢してなほも擦りつけて居ると、大變に痛んで來て、閉口したといふことがあつた。是が其當時の一ツ話しであつた。フェノロサ氏も翁から大蒜を勧められた一人であつた。京都へ行く時、同船で横濱を出帆して神戸に向つたが、遠州灘でフェノロサ氏は船暈で困つて居ると、翁は、例の大蒜を出して、ポリーに命じて、山葵わさび御を取り寄せ、搦汁を熱湯に入れて、夫れを吞ませた事がある。翁が坪内雄藏氏に會つたときにも、色々話の後、大蒜の話しが出て、小供には是非吞ませねばいかぬ。赤ん坊が産れたらすぐ吞せるが、胎毒下しである。入用の時はいつでも宅へ取りにお出でなさいと言はれたとやらで、其後坪内氏方の書生が大蒜を貰ひに來た。大方坪内では小供が産れたのだらうと話されたこ

とがある。翁が坪内氏に會見されたのは、氏か當時妹背の鏡と云ふ小説を書かれた、それを予等が時々讀んで聞かせたら、大層面白いと喜ばれて、どうも細君の選擇が肝用だ。お前等も能く氣を付けなければいかぬ。わしは細君の選擇が能かつたから仕合せである。家の観音様は美術學校の慈母觀音を描き初めてから女の事を觀音様と言つて居られたわしを能くして呉れる。若い者は能く氣を付けなければこの小説の様な事が起る。一體此坪内と云ふ人は妻君があるのだらうか。家は何處だ。本の奥付けに番地があつた筈だ。慥か本郷弓町か眞砂町邊だと覺えてゐるが、それではひとつ歸りに行つて見やうかと言つて居られたが、まさかと思ふと、翌朝、きのふ坪内へ行つて來た。色々と美術論をして來た。又來いと言つたから、其内行て見やう。四時頃から日が暮れて、大分遅くなつて、辨當腹がグウ／＼いふから、仕方なしに歸つた。先方もお附合で定めし困つたであらうと言はれたが、翁の口から困つたであらうと出るのだから、先方は非常な迷惑であつたらう。併し、なか／＼面白いお爺さんだと思つたらしい。其當時の讀賣に何か書てあつた筈である。其後再び翁が出掛たと見えて、昨日歸りに行つたら、今度は夕飯を出

したよ。それから、妻君が妊娠だそうだから、小供が産れたら大蒜を香せろと教へて來たと得意であつた。

大蒜ではまだ／＼奇談があつたが、今では大抵忘れてしまつたが、翁の大蒜萬能主義は遂に書に迄で及んだのである。それは、絹地は隈取りに墨や繪具がわきによるので、余程注意しないと條が着く。それで、絹を練らせて見たり、膠や明礬の加減をして見られたけれどもいかぬ。ポッターズ昔しあく打と云ふて灰のあくを紙に引きかて運筆が面白く行くのを思ひ出して、唐紙に墨水を強く引きその上にあく即ちポッターズを引たのである。墨色も能く滲染がきれいに行くのである。翁晩年の遺墨を見ると、滲染のきれいで墨色の淋清たるのはポッターズも功が無い。或人が水仙の根をすつて、其汁を引くとよからうと言ふので、夫れも試した。予もやつて見たが、淡ければ何の功も無いし、濃ければぬる／＼して仕方がない。そこで、予は、先生大蒜は如何でしようと言ふと、そーだと言つて、早速引て見られた。觀音の畫にも礬水礬水の上へ引かれたやうに覺えて居る。翁に大蒜論をかゝせたなら面白かつたらう。予も風邪の時一二度汁を熱湯に入れて醬油をさして吞だが味は悪くはない。さつぱりとして發汗したが、寢しなに呑んだのが翌朝になつても自分の口が臭くてたまらない。終日臭かつた。

便所迄も臭かつた是では堪まらないと思つた。焼いた熱いのは一層味が好いさうであるが、猶臭いさうである。翁の宅へ行くと、よく大蒜を調味したものが出る。食事時分になると飯を食つて行けと言はれるが、大蒜が出ると大變だから、無理に歸る事にして居た。大蒜に就いては予等は能く冷かし言つたので、少々お氣に入らなかつた。

それから大蒜の外にも、もう一つ翁の妙薬があつた。それは小連翹である。大蒜は主に内科用で小連翹は外科用であつた。大蒜の外科用にせられたのは本多氏の頭につけたのが前後初めてであつた。翁の説によると、是は根を煎じて塗り薬にするのださうで、或は又煎してその湯氣を呼吸すると肺に能いさうである。或日曜日に青年彫刻家山田鬼齋と云ふ男がやつて來た。これは岡倉覺三氏の妹婿で可なり中食時分になつたから翁は食事を進めた。例の大蒜の調理があつて、あとで茶も湯も出なかつた。喉が乾いてたまらぬ。翁は平氣で話を續けて居つた。すると、火鉢の土瓶がぐらぐらいつてゐるから。山田氏はそれを手づから茶碗についだ。色が甘さうに能く出て居る。ぐいと呑むだ。翁は氣が付いて、や、それは呑む

のではない。大變だ。小連翹だと言つて、驚かれた。呑んだ本人は猶びつくりして、眞青になつて早々歸へつて行つた。翁は翌朝予等に向つて、又しくじつた。昨日これ／＼であつたと語られた。翁が『又しくじつた』と言はれるのは毎度の事である。ともすれば途中でも馬車の中でも、出會ひ頭にいきなり、又しくじつたよ。どこそこでかく／＼であつたあッは、と四隣を驚かすのが例であつた。

(明治四十三年十一月一日)

先生本姓諸葛氏、先考狩野晴川院の門に入り、狩野の姓を受け、遂に氏となす。幼にして藩主の命により江戸に出で、狩野勝川院に學ぶ。安政四年木曾路を経て郷里に歸る。止まること五年、偶々江戸城火あり、改築の工成るに及び勝川院其裝飾を命ぜらる。是に於て先生師家の招に應じて再び江戸に出で、留まること數年、其間塾生を指導す。文久元治の頃藩主の肖像を描き、五人扶持を賜はる。後ち領内海防の爲め測量の技師として繪圖掛を命ぜらる。明治十年十月東京に出で芝新堀町に住す。同十七年文部省圖書取調掛を置くに及びて、先生をして専ら圖書教育の調査をなさしむ。同十九年京都及奈良へ出張を命ぜらる。同二十年三月寫景の爲め出張を命ぜらる。同年天皇陛下帝國大學植物園に御臨幸あり、御前揮毫を命ぜられ御目錄を賜ふ。次で皇后陛下に山水の額面を獻納し、黄八丈竊竝に茶器文房具を下賜せらる。明治二十一年十一月五日逝去。享年六十有一。谷中長安寺に葬る。法名東光院臥龍芳崖居士。

四

翁の女子教育

明治の畫聖とも云ふべき故狩野芳崖翁は、圖畫教育に多大の貢獻をされたのみならず、女子教育の事にも又大に心を用ひられたのである。之は世に發表される機會がなかつたが、常に予等に向つて語られた。何んでも世の中は女の力に因りて左右されるのである。多くの殺人犯や強盜犯や、あらゆる多くの罪惡は、女子の爲めに起るので、或る意味に於て、女子がかゝる罪惡をなさしむるのである。誠に恐るべき事ではないか。と、種々の例を擧て説かれた。成る程と思ふ事も甚だ多かつたのである。

翁が言はれるには、圓滿なる家庭は是又女子の力で、其和氣緩々たるのは即ち主婦の力である。一家團樂の楽しみは、延いて一國の平和となるのである。支那でも、大昔一人の女の爲めに國が滅亡した事があるではないか。女と云ふものは恐ろしい魔力を持つて居る。其魔力の使ひ處に寄りて大變な事になるのであるから

餘程氣を付けなければいかぬ。如何なる英雄豪傑でも一女子の爲めに身を誤まることが往々ある。昔しから女の髮筋にてよれる繩には大象もつながれると云つて居るではないか。恐ろしいものだ。併し又、彼の孟子の母といひ、正行の母といひ、松下禪尼といひ、賢婦人も澤山あつた。總じて父親よりも母親の感化が偉大なものである。小供は母親の感化により善くも悪しくもなる。夫は妻女の爲めにいかやうにも左右せらるゝものである。女子はちやうど觀音様のやうである。と言つて、今現に美術學校に所藏されて在る慈母觀音の圖を其時かき掛けて居られたが、此善哉童子の様に、觀音様次第で善人にも悪人にもなるのである。お前等も觀音様云ふ女子をを貰ふには能く考へなければ遂に一生を誤る事があるよ。優しそうな顔をして居ても、恐ろしい者がある。若い者はそれでやりそこねをするのだ。外面如菩薩内心如夜叉とは女子の異名であるから、氣を付けなさい。わしは仕合せにも觀音様細君が能くして呉れたからなあ。と轉た亡き夫人を追慕の念に堪へぬかのやうであつた。夫人島山氏は翁に先き立つこと一年前の初であつた。

併し其恐ろしい魔物も、一轉すれば所謂賢母良妻淑徳圓滿な觀音様になるのだ。

其一轉するのは何によるのかと云ふと、即ち教育である。何にも六ヶ敷事は教へなくとも、女の道一筋でよからうが、心掛を第一として、高尚な氣風に向はせるのが肝要である。今の様に男女同權だなんてなまいきなお轉婆娘には困るよ。學校でも西洋のうはつら許りまねて眞實の女子の本分と云ふ事をそつちのけにして、やれ體操だの、舞踏だのと、ピン／＼跳ね廻らせるのがわしには氣が知れぬよ。女子は身體を丈夫にするのは肝心だが、男のまねや西洋のうはつらを眞似なくつても女子相應なことがあるだらう昔は薙刀は女子の心得で置くべき事で體操のやうなものであつたが、舞踏などはしなかつた、お前のお祖母さんもそうだつたらう。女子は餘り出しやばると良い事がないよ。杜雞司且といふのは東洋流の訓戒である鎌倉の政子や浪花の淀君などは女傑ではあつたが余り出しやばり過ぎたのだ。況してなまじつか學校出の女子では心配であるよ。わしの考へも色々あるが、まあなるだけ内輪で、心がしつかりしたものを育てるのだ。内心如金剛と云つたやうにするのだ。良人を大切にするのが第一である。其心をやはらげる許りではない、勵ます事も肝要だ。内助の功と云ふのはそこである。と言つて常に

予等門人に語られたのである。

明治四十三年日記抄

十一月五日

晴

戌の年戌月戌日である。

此日は芳巖先生の二十三回忌であるから午後三時頃から墓参に出かけた。實は、本日は參詣が出来ぬだらうと思つたから、先日お参りをしておいたが公務の統り合せがついたので其法會に會することが出来た。喪具師の銀次郎は、舊恩を忘れず、主となつて萬般の世話をした上、手料理の夜食迄で一同に出した。先生も嘯地下によるこんで居られたであらう。參會者は友信翁と天城氏と予とであつた。高屋哲哲氏は七回忌の時も今度も地方に行て居るので參會が出来なかつた。雅邦翁の末亡人は午前中に參詣したそうである。秋水が催してゐる遊藝展覽會は景氣がいゝそうだが、法會に至つて寂しかった。併しそのひつそなのが却つて先生の遺志に會つて居りはすまいか、四人が互ひに昔話をすると天城氏は例の大森を頭に塗つた話をする、一同それから大森の話で持ち切つて別れた。

六日 晴

日曜日

芳巖先生の逸事を書き集めて、一冊として知己に頒たると思ふ。今の中に思ひ出して書き付けて置かなければ、だんだん忘れてしまふし、且つ世間では聞き誤つたり色々話を混同したりして、其真相を誤る事になるかもしれぬ。先年高屋氏が主になつて編纂した遺稿(其材料は殆ど予が蒐集したのである)の中の記事も餘り大要に過ぎて、しかも稍複雑な點があるので、誤解し易い恐れがある。況て先生に一面識も無い人等が聞きかぢつて書いた逸話や傳記には誤りの多いのも最もである。我々でさへ時々思ひ違ひもあるのだもの。併し予には先生に師事して居つた時分の日記がある。それに色々當時のことが書き記してあるから大に参考になる。此日記は美術學校創立前後の志料といふべきものであるが、書生の時の日記だから事實はわかるが人に見せる程ではない。至つてつまらない事が深山書であるのである。

先生と予との關係

二十三回忌追善茶話會談話

予が初めて先生に會つたのは明治十七年で、其時分予は狩野友信翁の門に洋畫を習つて居つた。最も其頃は畫家に成るつもりでやつて居たのではなかつた。予は幼時軍人志望であつた。齒を習つたのは樂みであつた。或る動機から遂に専門家になつたのである。或る時友信翁が、一諸に來いと言はれるから、従つて行つて見ると、老人揃の集會である。何んだか色々の話があつたが、其内の一人で、べんて、こな人がなか／＼面白い研究談をやつた。あとで聞くと、それが芳崖先生であつたのだ。集つた家は有賀長雄氏宅である。此時の人々は、狩野永蕙、芳崖、友信、木村立巖、他二三人で、雅邦氏は加はらなかつた。岡倉覺三氏も此時分にはまだ中間入はしなかつた。此集會は鑑畫會の相談であつた。會名は有賀氏の父長隣翁の命名だつたそうである。席畫が初まる。先生は墨竹の額をかゝれたが骨法の工合から氣韻の高い處がなか／＼尋常の筆ではなかつた。芳崖先生は墨竹が得意であつた時に、友信翁から

予を紹介された。芳崖先生の門人中では、予が一番故參なのである、其後鑑畫會では何つとも先生に會つた。ところが先生が芝新堀町から本郷西片町十番地に、二十ら本郷通へ行くに三筋道がある其へ移られた頃、予は友信翁の使で膠を貰ひに行つた事中央の道を行くと二筋目の左横町があつた。その時初めて親しく先生の教を聞く事が出来たのである。

『畫をかくには寫生が第一で、それから古人を學ばなければいかぬが、これ迄のやうに古人の眞似をしてはいかぬ。甚だしいのになると、こちらに雪舟の岩があるかと思ふと、あちらに馬遠の遠山が出る左から夏珪が現はれると云ふやうに』と言ひかけて、先生は両手を懷中に入れて『こちらから元信こちらから探幽』と、懷の中から手をツ、張つて見せられて、これでは一幅の畫がばら／＼である。まともりが付かぬ。だから、古人の畫を澤山見たり、摸寫をしたりして、能く覚えて、腹に入れて消化して、やがてそれらが自分のものになつて出て來なければ役に立たぬ。と諄々として教へられた。少年時代の予は、その教訓の外に一種崇敬の念に打たれたのである。その折り膠を包んで呉られた包紙は、先生の反古で、先年出版になつた芳崖遺墨前編にある秋景山水の額面で、今に保存して居るが、見る度びに其

當時の事が思ひ出されて、常に手に教訓を興へてゐるのである。それから後は、書が出来ると友信翁は芳崖に見てもらへと言はれたから、何時も先生の教を乞ふ事になつた。小下書などに先生の墨痕があるのが幾枚も残つてある。先生が下書を直されるのには、第一に其圖の心持を取つて、それを完全ならしめるやうにとせられるので、たとへば『此考へは面白い。それにはこゝを霞でかくさなければいかぬ。そうすれば主要の點が益々能く見えるといふものだ』と云つたやうに、どこまでも初めの心持を失なはぬやうに添削される。偶然に出来た形で、さまで苦心しなかつたものでも、若し趣がある場合には、其點を指示せられた。出来上つた書を持つて行くと、手落の場所などを叮嚀に繕つて地の渲染などが隈があると、これも氣にして直された。唐紙などで塵が着いてあると、先生は小刀を出して、大眼鏡を掛けて、それを削り取つて、あとを色なり墨なりで繕つて呉れた。其親切と熱心なものには敬服の次第である。當時は大抵紙本に描いたもので、絹地にはまれであつた。腕を見せるには紙に限る絹にかきつけると、墨が滲つて味が乏しくなるものである。先生は又、書をかくには人格が高くなければいかぬ。人格が高ければ、自然描く書も高尚になるものだ。よく氣を付けねばならぬそれか

ら又、腕が達者過ぎるも宜しくない。器用過ぎるのも同じ事だ。所謂過ぎたるは猶及ざるが如しだ。北齊や曉齊は腕が余り達者過ぎて下品なものになつたのだ。容齊だとか是眞なども器用が過ぎたのである。むしろ無器用の方がよい。書の尙いのは精神である精神の入らぬものはいくら筆力があらうが手際が好からうが、眞の美術として見る事が出来ないのだ。なまじつかなものより、小供の書いたものに採るべき點がまゝある。何んでも無我の界に入らなければいかぬのだ。と色々と教訓された。

曾て共に妙義へ行つた時は、實景に就て批評された。此當時流車は上野から横川驛までしかなかつた。初日横川から人力車で坂本村を過ぎ、碓氷峠を登るときに、先生はふり返り、景色の説明をされたが、車上では思ふやうに話しが出来ぬと言つて遂に車から降りて説明しながらこつくと峠を越えて輕井澤に着いた。翌日横川へ下る時も同様で、車夫は空車を引てお供である。此行には種々な奇蹟が多かつた。妙義中嶽の神官の處へ一泊をした時には、翌朝の日出前に山の景色を寫生しろと命せられた。時は三月下旬ではあるが、残雪が處々にあり、しかも霜が雪のやうに降つて居て、寒いのに閉口したが、成

程早朝の山の景色は格別であつた。毎日宿に着くと、まづ其日の寫生を先生に見せる。色々の批評がある。なか／＼有益な修學旅行であつた。予は此旅行で風景畫の研究が一步を進めたと思ふのである。予は其前年碓氷を越え信州路より木曾に入り木曾川を下り大垣に出でそれより郷里越前に歸先生も大に得る處があられたやうだ。今米國にある懸崖飛沫本朝夕陽歸樵紙などの圖は此旅行のをりの寫生である。此時の寫生は美術學校にある皆だが十三四年前に岡倉覺三氏が同盟辭職の時に先生の下畫類は歸京してから、隨行した門人共は、寫生を仕上げて先生の批評を大抵散逸したのである予が寫生したものゝ内に、火山岩の皴法を工風したのを見られて、これは面白い。どう云ふ風にかいたのか教へると言はれた。予は實は是迄狩野家のやうな皴をかくと丸みが付かないから、色々と工風して見たらどうやら丸く見えるやうですと言つたら、大喜びで、其畫法をわしに呉れ。一つ描いて見ると言つて、描かれたのが、即ちかの福壽之圖二幅對の巖の皴法である。此繪は山縣有朋公の依頼で描かれたので、兼て山縣公が一度芳崖に會つて見たい。かつ畫も一幅かいて貰いたいと、伊藤公を経て依頼されたたさうで、山縣公は上野成小路の松源樓に鑑畫會の大會があつたとき芳崖先生の仁王、維摩、羅漢、子母龍等を觀て先生の平凡ならざるを知られたのである先生は、山縣は軍人だから何かしつかり

したものを描いてやらう。しかし先方が何か目出度いものをと云ふのだからと、種々に考へられた末、此繪が出来たのである。左が老松で右が巖で蝙蝠が飛んで居る。しかるに此蝙蝠には髭がない。これに就いてははじめ色々と皆が議論をやつたのだが、先生の信用して居る結城正明氏が蝙蝠には髭が無いと言つたので、それで遂に此圖の蝙蝠には髭が無いことになつたのである。初めの圖は左が松で右が鹿であつた。此繪は先生の得意の作で、出來上ると、來る人毎に構圖に就て色々と説明をされた。二幅對の關係を説いて、逆にしたり横にしたり線の配合を示された。これからかう云ふ畫をかくのだと言て居られた。其内に山縣の處へ持つて行つて、色々話をするのだと楽しんで居られたが、圖らずも遂に病を得て歿せられたので、此繪を見ると先生の得意の顔が思ひ出されるのである。又先生がつひに山縣公に面會されずして終はられたのはまことに遺憾な次第であつた。此繪は其後大岡育造氏が山縣公から貰つたとかで、それからはどう轉々したのか、今は桂侯の所藏であるさうである。此繪の第一回の下畫は予が保存して居る予が作品で、先生の墨痕のあるので現存してゐるのは、冬の山水紙で、白鷺の屏風

本紙は小下畫の時に非常に賞められた。驚が流の小魚をねらつてゐる趣がいゝと言はれた。早速かき上げて見せようと思つて居る内に病氣にかゝられたので、遂に見せることが出来なかつたのは残念である。又嘗て全紙に觀音の極彩色を描いて見てもらつたが、これも大層賞められて、來合せて居つた雅邦翁や山名貫義翁に見せて、古土佐の趣きがあると賞賛されたことがあつた。以上の三點は何れも紙本で、今現に一族の岡五郎氏の所藏となつてゐるのである。

圖畫取調所が出来ると、先生は常に、いまに畫の學校が出来るといふから、そうなるとお前等が生徒を教へるやうにならなければいかぬ。と言はれたが、其内に取調所は美術學校事務所となつて、其年の十一月五日に歿せられたのである。誠に残念の事であつた。

先生からの手簡と、それから膠の包紙であつた山水の畫は、予が大切に片身である。

(明治四十三年十月二十九日)

此記は、本年恰も故芳崖先生の二十三回忌に相當し、諸所より先生の逸話を語り聞せよと請はるゝまゝに、聊か思ひ出づる節々をものしたるものなり。

去月廿九日は、夕刻より予が樂只園に於て、先生の追善茶話會を催しぬ。靈前には、それぞれの供物の外に、月桂樹を飾り、美術評論社より寄贈の果物一籠、予が門弟等が心づくしの草花一束を供へたり。場内には、先生の手簡並に秋景山水、外五十點許の遺墨を陳列して、來會者に縦覽せしめ、予は種々先生の作品に就きて説明するところありき。即ち『先生と予との關係』の如きも、其席上に於ける談話の一節にして、是等予の談話を集めて一小冊となしたるものを、やがて「しのお草」とは名くるなり。なほ他に、語り傳ふべき先生の逸話あまたあり。他日子が所藏の遺墨と共に刊行して、廣く世に示さんと欲す、

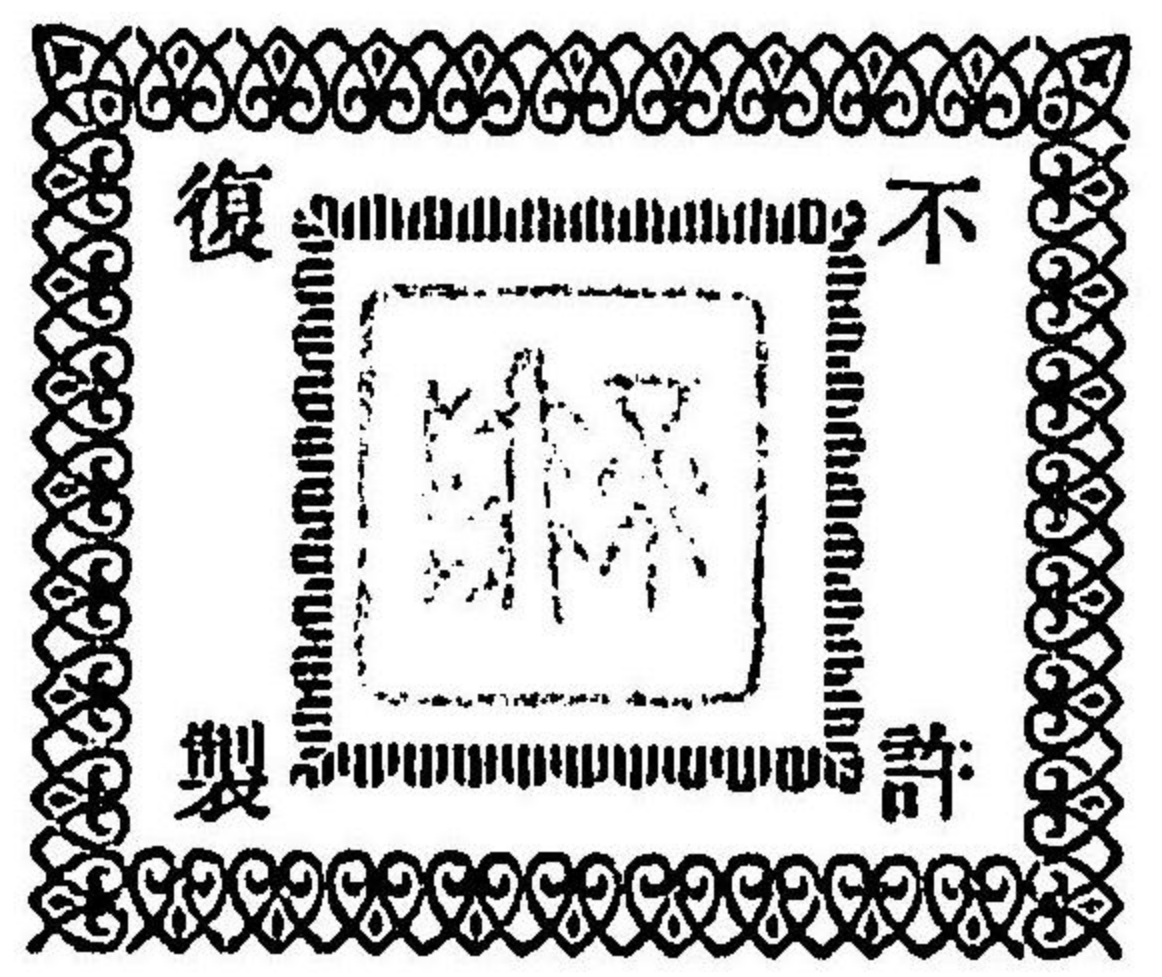
明治四十三年十一月五日

長安寺より歸りて

不崩識

327
392

明治四十三年十二月十五日印刷
明治四十三年十二月十八日發行



著者 岡 不 崩

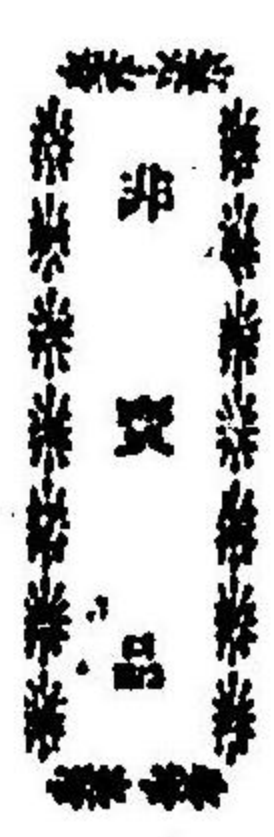
東京市小石川區久堅町八十一番地

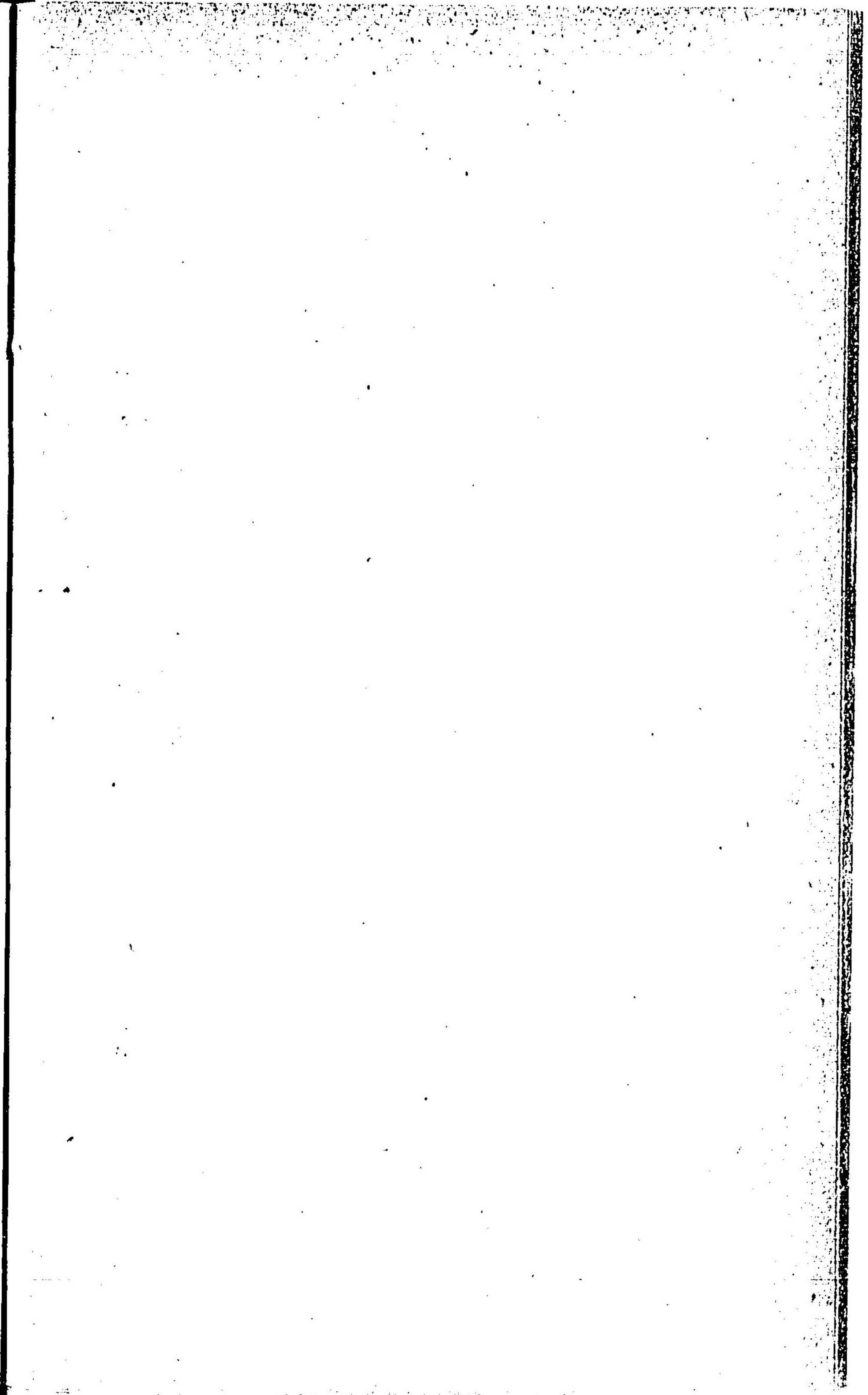
印刷者 安 西 惣 太

東京市本所區石原町五十五番地

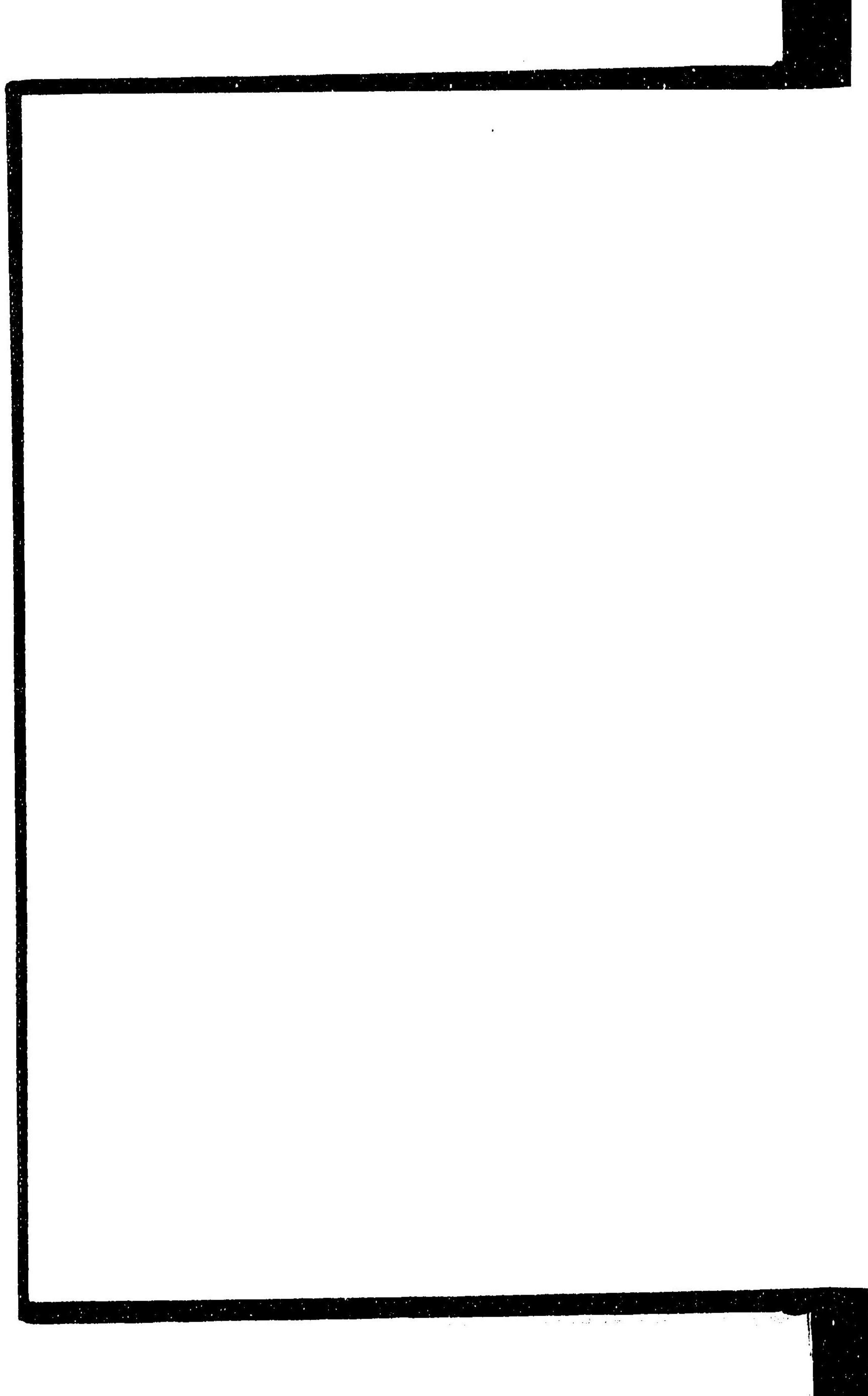
印刷所 日 英 舍

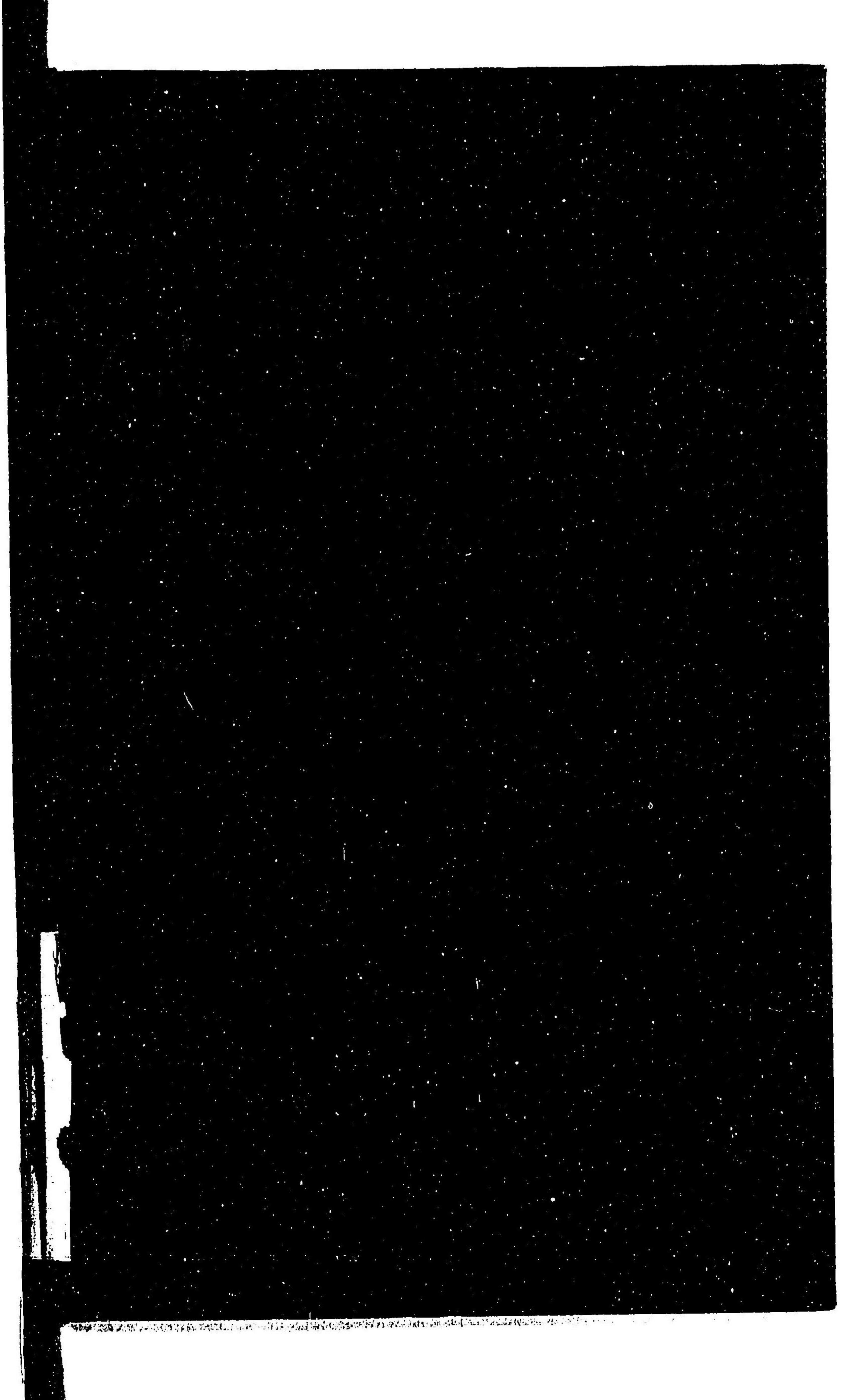
東京市麹町區飯田河岸三十一番地





7





327

392

069928-000-4

327-392

しのぶ草

岡 不崩 / 著

M43

CEC-0784



